五木寛之
にっぽん退屈党

文藝春秋

GUENICHIRO

にっぽん退屈党

昭和四十八年七月十五日　第一刷
昭和四十八年十月十五日　第四刷

定価　五九〇円

著者　五木寛之

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社文藝春秋
〒一〇二東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷所　凸版印刷
製本所　大口製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Hiroyuki Itsuki 1973　Printed in Japan

0093-302830-7384

にっぽん退屈党／目次

自殺と自瀆……5
奇怪な退屈者……33
想像力のプレイ……52
コーヒーと車と女……71
最終秘密兵器……130
楽しき拷問……141
童顔の犠牲者……152
特攻作戦第一号……191
ニヒルな勇者たち……227
華やかなる襲撃……238
倦怠のモンテカルロ……258
富士パニック計画……285
昭和の大騒乱……296
富士に立つ火柱……306
箱舟なき終末……316
作者あとがき……325

装幀　柳生弦一郎
題字　原アート・
アクチュアル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にっぽん退屈党

自殺と自瀆

雨がふっている。

灰色の雨である。ガラスごしでは、ちょっと見るとふっているのかいないのか、はっきりしないほどの小雨である。

この朝、東京は時ならぬ雪であった。

公園や、わずかな空地や、ビルの屋上などに、昨夜のうちにふり積った雪が白くのこって、街にちょっとした風情をそえていた。

だが、それもしょせん季節はずれの春の雪である。ビルの窓に舞っていた風花(かざはな)もやがてミゾレまじりの小雨にかわり、午後になるとヴェルレーヌ風の霧雨と変った。

今、その霧雨にけむる東京を、港区は芝の増上寺に近い広々とした敷地にそびえる一流ホテルの窓から、ぼんやりと見おろしている一人の青年がいた。

彼は見たところ二十三、四歳くらいの若々しさだが、よく注意してその横顔を観察すると、どうやら三十代のなかばを過ぎているのではないかとも思えてくる。だが、ひょっとすると十七、八歳かとも見える。つまりひとことで言って、年齢のはっきりしない奇妙な若者なのだ。

彼はいま、窓際の幅二メートルほどのスペースに腰をおろし、背中を壁にもたせかけて煙草に火を

つけようとしていた。
背丈はおそらくその年代の日本人としては、平均的なサイズだろう。ただ、ぶらぶらさせている脚の長さから察すると、かなり恰好のいいプロポーションの持主と思われる。
ラクダ色のスウェーターに包まれた上体は、外から見ると着痩せするタイプらしい。実際は、かなり引きしまった立派な肉体が隠されていそうにも見えた。
頭髪は長くもなく、短くもない。柔かな髪の毛らしく、うまく頭の形にそって寝ており、額の上あたりで横に流れている。まだ春先だというのに、いい色に陽灼けした肌が襟元からのぞいていた。おそらく下着なしでじかにスウェーターを着込んでいるのだろう。
彫りの深いという顔立ちではなかった。といって、日本人特有の、あののっぺりした平面的な顔でもない。どこか猿に似ている感じもあり、またひどく人間くさい雰囲気も発散する顔でもある。最近の若い娘たちには、〈カッコイイ〉と見られるタイプかもしれぬ。
しいて類型をもとめれば、日本人のスターやタレントには、ちょっと見当らなくて、むしろ外国の俳優に似ている感じもある。そう、あのスピード狂の奇妙なスター、スティーヴ・マックイーンだ。
その和製スティーヴ・マックイーン、すなわちどことなく猿に似たイメージを持つ青年は、いまマッチをすって唇の端にくわえた煙草に火をつけたところである。
目を伏せると、思いがけず長いまつ毛が翳をおとして、青年の顔にかすかに甘い感じをそえた。
深く一服すい込んで煙を吐く。
エア・コンディショナーのせいか、煙が一定の方向へ縞になって流れて行く。適温にたもたれた室内は、ひっそりと静かだ。
青年はかすかにくもった広いガラスを掌でぬぐった。外の風景が不意に鮮明にうかびあがる。

道路とアプローチに面した正面の部屋なので、視界はかなり広い。
正面にどす黒く汚れた緑地帯の樹々が見え、薬科大学の建物や、増上寺の古びた楼門なども霧雨の中に眺められる。
やや右よりに赤い典雅な煉瓦造りの、あまり東京には似つかわしくない洒落た建物が見えるのは、フランス風の高級料理店クレッセントであろう。さらにそのむこう、灰色の空を垂直に切って積木型の超高層ビルがそびえていた。
「かつての日本一のビルか――」
青年が独りごとのようにつぶやいて、かすかに苦笑した。
「おれだって日本一だったことはある」
その時けたたましい音をたてて、ベッドの横にある電話が鳴った。
青年はちょっと眉をひそめて電話を眺めた。それからドアをふり返り、素早く立ちあがってドアに体を寄せ、外の気配をうかがうように耳をすました。
電話はまだ鳴り続けている。
ベルは十五回鳴ったところで、腹を立てたように鳴りやんだ。青年は煙草をテーブルの上の灰皿に押しつけた。そして部屋の中央に腕組みして立ち、右手で顎の無精ひげをゆっくりとなで回す。
また電話が鳴った。
こんどはかなりしつっこく呼び続けている。
青年は動かず、つっ立ったままだ。
正確に三十回鳴って、電話は静かになった。
「ばかやろう」

青年は小声でつぶやいた。ちょっとかすれた聞きとりにくい声だった。
彼は腕組みしていた手をほどき、二、三度前後に上体をそらせた。いまの電話は、かなり彼を緊張させたようだった。
それから彼は、浴室のドアを開け、バスタブに青いゴムのマットをしくと、湯加減を調節しながら片手でズボンを脱ぎはじめた。靴下を脱ぎ、ブリーフもとりさると、意外にたくましい下半身が鏡にうつった。
スウェーターの下は、やはり何もつけていなかった。青年は冷蔵庫からビールの小びんを持ってきて、ゆっくりと浴槽の中へ身をしずめる。ながながと湯の中にねそべると、ビールをラッパ飲みしながら目を閉じた。
ドアのむこうで、また電話の鳴る音がきこえた。
青年はそれを黙殺して、しばらく湯の中に寝そべっていたが、やがて起きあがり、バスタオルを体に巻いて、ふたたび窓際にもどった。しばらくじっと立って外を見ているうちに、大きなくしゃみを二、三度した。それからベッドの横のテーブルについている温度調節のダイアルをハイに回し、茶色の皮のボストンバッグを手に、ソファーに腰をおろした。体をひねって、室内の灯火をつける。
ボストンバッグから彼がとりだしたのは、洗面具の袋である。その中身をテーブルにぶちまけると、クリームのびんや、歯ブラシや、小さなハサミなどが床に転がった。
青年はその中から一枚の安全カミソリの刃をつまみ出した。それから両刃の薄く柔かな金属片をつつんだ薄紙をはがし、油が表面に浮いたその刃をスタンドの光にかざした。
安全カミソリの刃をテーブルの上において、青年はしばらく考えていたが、再びボストンバッグの中をかき回して、小さなびんをとり出した。中には白い錠剤が、びんの半分ほどはいっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「さて、どっちにするか」
青年は首をかしげて、遠足の弁当の、卵焼きとチャーシューのどちらに箸をつけようかと迷っている小学生のような表情をした。
やがて青年はカミソリの刃と、薬のびんを持って立ちあがった。下半身を包んでいたタオルが床に落ち、彼は生まれたままの姿で窓際に近づいて、さっきのガラスに接したスペースの上に坐り込んだ。部屋の温度は次第に上昇し、陽灼けした青年の額にはうっすらと汗がにじんでいる。
青年は薬びんのふたを開け、錠剤を新しい灰皿の上にざらざらとこぼした。そして手近に転がっていたボールペンの尻で、ていねいに一粒ずつつぶしはじめた。
びんの中の錠剤は、約四十錠ほどあった。灰皿の中にたまった白い粉末を、指先につけて、ちょっとなめてみる。
「どうもあんまりパッとしないな」
青年は首をひねって考えていたが、灰皿を横にずらして、こんどは安全カミソリの刃を手にとった。指の間でしなわせると、かすかな鋭い音を立てて鋼鉄の刃が二つに割れた。
その片方の鳥のクチバシのような鋭利な折れ口に、青年はそっと舌の先で触れた。
「こっちのほうがよさそうだ」
青年は少し考え、裸のまま洗面所にもどって、ポリエチレンのバケツにバスの湯を満たして持ってきた。
両膝の間にそのバケツをおき、左手を湯の中にひたしてみる。
「ちょっと熱いか」
青年はまた洗面所へ行って、バケツの湯を水でぬるめてもどってきた。

「さて、と——」

青年は体を曲げて床に落ちている煙草の箱を拾いあげた。一本抜き出して口にくわえ、マッチをすって火をつける。その姿勢のまま、なんとなくぼんやり外の風景を眺めているうちに、少し睡くなったらしく、青年は煙草を窓ガラスでもみ消して目を閉じた。

しばらくそのままの姿勢でうとうとしていた青年を目覚めさせたのは、ベッドのそばの電話の音だった。青年は今度もそれを無視した。

彼はあたりを見回し、手をのばして一冊の男性週刊誌をつかんだ。グラビアのページをパラパラとめくって、一枚のヌード写真に顔をちかづけてのぞきこむ。それは、まだ女とはいえない幼女のヌードである。直線的な体の線がまじわる一点に、そこだけ丸味をおびた部分が、修整されて変にエロチックな感じだ。

青年は片手で雑誌を持ち、もう一方の手で自分の脚の間のやや褐色の茂みをまさぐった。うなだれていたペニスが、少しずつ背のびをするように目覚め、次第に朝焼けの空の色をおびた顔をあげはじめる。

青年の手が、ゆっくりと律動的にフォービートをきざみはじめた。彼は、かのオナンの行った行為をいま自殺の直前にはじめたのである。

雑誌を支えた手が、かすかに震え、やがてその表紙の向こうの肩がこわばり、青年の投げ出された足の指が内側に折れ曲っていった。

やがて青年は雑誌を投げて立ち上った。下肢を伝う温かな液体をそのままに、部屋の中をゆっくりと輪をかいて歩きまわった。

「どっちにするか？」

青年は灰皿を満たした白い粉末を眺め、それから折れた安全カミソリの刃を指でつまんだ。その時、ドアの方で、何かかすかな音がきこえた。青年はちらとそちらへ視線を向けた。ドアの下から青い小さな紙の封筒が、滑りこんでくるのを青年は見た。

「なんだろう？」

ホテルのメッセージ用紙である。青年はそれを開けて白い紙片をとり出して眺めた。長文のメッセージだ。彼は手早く黙読した。

――君が電話に出ないので、フロントからメッセージをとどけてもらうことにした。私は君と何の関係もない人間だ。しかし、君に関心はある。君はさっきからどのようにして自殺しようかと、ひどく迷っているようだが、ひとつ、私のプレゼントを受けてくれればうれしいと思う。十五分後に私の運転手が君の部屋をノックするだろう。君は黙って彼が渡すものを受けとるだけでいい。それをどう使うか、それは君の勝手だ。だが、その一部始終を、私は眺めていたい。さっきから三十分以上も、私は君の行動を注目していた。正直に言おう。私は君の泊まっているホテルの、ある範囲内の窓から室内をのぞくことのできる位置に住んでいる。君に私のプレゼントを受ける気があるなら、その合図に窓をそのままにして灯火も消さずにおいて欲しい。予定通り死ぬ気なら、それはそれで結構。私はこちら側から、君の指の爪先の動きまでを注視している。では、君の生き方、または死に方を、ここから一人の観客として眺めている人間として、心からなる親愛の挨拶を送る。私はひどく退屈しているのだ。いい一幕劇を見せてくれ給え。

青年はそのメッセージを二度くり返して読んだ。それから窓際に行って、外を眺めた。

雨はいつの間にかやんでいる。
あたりはいつの間にか薄暗くなって、高層ビルは無数の灯火で飾られていた。
その時、青年の胸にどのような思いが渦まいていたかは、作者も知らない。ただ、彼は目を細めて、外のどこからか自分をみつめている奇妙な視線を、はっきりと感じていたことは間違いなかった。
十五分がたった。
青年の背後で、ドアをノックする音がきこえた。
それはゆっくり二度、そしてさらに荘重な感じで三度つづいて室内に響いた。
青年は裸のまま、ゆっくりとドアに近づき、一瞬ちゅうちょしたのち、鉄のチェーンに手をかけた。
青年の脚の裏側を伝って、白い光沢のあるしたたりが床を濡らした。
「どうぞ」
と、青年はややかすれた声で言い、ドアのノブを引いた。

こういう場合、ドアのむこうに立っている人物としては、どのようなタイプの男、もしくは女がふさわしいか。
青年はドアをあける瞬間、無意識のうちに目前にあらわれるべき人物のイメージを瞼の裏に思い描いた。
〈痩せた老人か？〉
まず頭にひらめいたのは、そんな考えであった。
〈それとも痩せた娘か？〉
いずれにしても、その青年の期待は見事に裏切られた。

そこに立っていたのは、まるでゴムまりを思わせる肥った中年の男だったのだ。
「失礼」
と、その男は会釈して言った。
彼はちょっととまどったように相手を眺めた。それは相手の服装が、運転手というには余りにも堂堂としていたからである。
すなわちその肥った中年男は、まずどう見てもエルメスとおぼしき金色の馬蹄の模様のついたネクタイをしめていた。
エルメスの品は、しばしばその所有者の人格を疑わしめる場合がある。すなわち、グッチのカバンとか、エルメスのタイとか、またはデュポンのライターのごとくに、一見してそれとわかる高級品を身につけることは、一種の金満家の自己紹介のようなものであるからだ。
金持ちであることは少しも恥ではない。むしろ現代においても、いまなおそれは一つの社会的尊敬の対象である。しかし、金持ちであることと、それを誇示するのは全く別な次元の問題であろう。そして、いま青年の前に立っている中年の男は、少なくともそのネクタイによって本人の経済的な立場を証明しているようには全く見えず、しごく自然にその高価なネクタイを結んでいる。
「あなたがこのメッセージをくれた人の運転手なんですか？」
青年は不思議そうに肥った男に対してたずねた。
「そうです」
「ぼくに何か渡してくださるそうですが」
「はい」
そのエルメスのタイをしめた紳士ふうの運転手は、うなずくと、手に持っていたケーキの箱のよう

な包みを青年の前に差し出して言った。
「少し重とうございますが」
「どうも」
青年はその箱を片手で受けとって、重さをはかるようにわずかに上下させた。
「なんです、これは」
「私にはわかりません」
「受取りか何か必要でしょうか」
「必要ないそうです」
「では——」
「失礼いたします」
青年はドアをしめようとして、ふたたび体を廊下の方へのり出すと、
「ちょっとうかがいたいのですが」
「なんでしょう」
男はおだやかにきき返した。
「あなたのご主人というのは、凄い財産家なんですね」
「はあ?」
「運転手のあなたがエルメスのタイをしめてるほどですから」
「恐れ入ります」
「ご主人は一体どういうネクタイをしめてられるんです?」
「皮でございます」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c